

## 百人一首成立の発端 藤原定家と宇都宮頼綱の交流

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



清風寺にある蓮生(頼綱)の墓所



蓮生画像(京都三詠寺所蔵)

今どき「百人一首」を知らない人はいないだろう。小学校の国語の授業をはじめ中学校や高校の古典の授業で学ぶので、その中に取められた歌を一生懸命に讀んだ人も多いたのではなからうか。ところがこの百人一首の成立が、宇都宮頼綱と大いに関わっていたことを知る市民は案外少ない。

頼綱は治承二年(一一七八)、業綱の子として生まれる。母は新院蔵人平長盛の娘である。父の業平が早世したので、祖父の朝綱に育てられる。祖父の公田掠領事件に連座して豊後の国へ配流されたが間もなく許される。祖父朝綱が益子大羽に隠棲後、頼綱が宇都宮氏五代として跡を継ぐ。はじめ稲毛三郎重成の女、次に梶原景時の女を迎えたが、後に北条時政の女と結婚し北条氏との結びつきを強める。

若くして鎌倉武士としての地位を築いた頼綱であったが、宇都宮一

族の存亡にかかわる大事件が降りかった。元久二年(一一〇五)謀反の嫌疑を受けたのである。同じ年笠間に侵攻して甥の時朝を笠間城主にしたこと等が嫌疑の発端となったようだ。頼綱は嫌疑を晴らすために出家し、蓮生と号し、直ちに鎌倉に向き異心無きことを証し一命を得る。三年後、上京して法然上人に帰依し、法然亡き後は、西山善峰の証空上人に師事したのである。

一方、頼綱は当代きつての歌人藤原定家に歌を師事した。定家に師事した背景には、京都の頼綱の邸宅と定家の邸宅とが近く交流に便利であったこと、また、不遇をかこつていた定家にとって裕福な鎌倉の御家人との交際は、望ましかったこと等が考えられる。

ともあれ頼綱と定家の交流は、親密さを増し、頼綱の娘と定家の子息が家とが結婚するまでになった。そして嘉禎元年(一一三五)五

月、頼綱は嵯峨に築いた中院山荘の障子(襖のこと)の装飾に色紙を定家に依頼したのである。中院山荘は、京都郊外嵯峨の地、現在の厭離庵のあるあたりといわれている。そこは無き師法然の遺骨が納められた二尊院の近くであり、法然の遺骨を守護するに相応しい所であった。新築なった山荘の障子に貼るための色紙を、定家は求めに応じて百枚贈ったのである。この間の様子について定家は、「名月記」に「嵯峨中院の障子の色紙形を予書くべきの由、彼の入道懇切なる故に、極めて見苦しき事といへども、なまじひに筆を染めて之に送る。古来の人の歌各一首、天智天皇より以来、家隆・雅経に及ぶ。夜に入り金吾に示し送る」と記している。定家は夜に入るまで色紙を書き、子息の為家を持たせて頼綱のもとに届けさせた。色紙の内容は天智天皇より鎌倉時代の藤原家隆・藤原雅経までの代表的歌人、百人の歌を各一首ずつ選んだものであった。それが今日の「百人一首」(「小倉百人一首」とも)といわれるもの基となった。

宇都宮市は現在、餃子・カクテル・ジャズ・自転車等を通じて街おこしを展開している。こうした街おこしの中にあつて「百人一首」に親しむ街おこしも、宇都宮市ならではの独自性に富んだ街おこしである。頼綱が現世にいたらすぞかし喜ぶに違いない。大いに盛り上げたいものである。